



34

「縛」

またあの夢を見た。学生に戻った僕が、サッカーの試合に臨もうとしている。

試合開始直前になって、持ってきていなければいけないものがないことに気づく——スパイクだったり、すねあてだったり、あるいは、ユニフォームの種類を間違えたり。細部はそのたび微妙に違うのだが、とにかく「忘れ物に気づいて猛烈に焦る」という感覚だけは共通していて、ぞわぞわするほど怖い夢だ。

目覚めると、胸の奥からほっと息が抜ける。

ああ、夢でよかった、と。

実はこれは、僕が経験した実話に基づいている。高校時代、れっきとした公式戦で、相手チームがユニフォームを忘れてきたことがあった。そのため、直前で3―0の不戦勝になったのだ。

両チームともウォーミングアップを終え、あとは試合開始のホイッスルを待つばかり。同級生や保護者らもやってきて、ギャラリーの期待も高まっていた。

ところが、相手チームのベンチがざわざわしてピッチに出てこない。チームの方針にもよるが、アップの時には練習着を着て、ユニフォームは直前になってから着ることが多い。きつとこのタイミングで、用具係が忘れ物に気づいたのだろう。

結局試合は行われなかった。けれど、試合前の張りつめた空気と、相手選手たちの狼狽した様子はいまもはっきりと思い出せる。

相手チームながら、やらかしてしまった人に同情した。

「ひどく怒られて辞めなければいいけど」。

そんな性格が災いして、きっと今も僕はこの夢にうなされているのだと思う。

けれど同時に、こうして夢となってよみがえることに、記憶や心の深さというものを感じる。あの日のできごとが、今もこうして自分に繋がっているのだ。

目を覚ましたあとも、しばらく心臓が早く打っている。たぶんもう、試合に出ることはない。

けれど、あの緊張や真剣な感覚がどこかに残っているのは、なんだか悪くない気がする。

もうこの夢にうなされるのは最後にしたい。

きっと彼らにとっても、笑い話になっているだろうから。